孟子枕

正
六九八

ヘ 5
1441

門 利 福 1444 巻

早稲田大学図書

續草枕集

遠中

斗入

為馬して俳諧の反芻哉　草人

翁の海苔もて風を尋る　岳輪

梅咲この三日月は時鳥　素檗

枚菜刺き仏居かゝる　乙堂

子の訓る彩の栄恒かゝ嶺し　嵐外

雨の窓りの人遠の声

ほそくと秋の明渡る声の後　入
けしの盛りハ今又日あり　堂
引抜て藝打掛ふ物　籠り　蘗
いそくんハ出る　相撲　入
うき事の袖もぬらす　ぬる中　外
ちらふ　ハ及ふ大年の　無　蘗
小角豆奏る月ふ音の悪尚　堂
引板おそ流しきハ物ひとそ　外

何ハもう秋の気ハ消てハ　雲帯
小坊の連を跡をふまハ　如毛
ふ智の華鞋ハ出る花の婦宜　蘗
度の気ふのうとく板しき　堂
苗代の気ハ流ハ水の色　吐丈
流敲の考ハ　ハたる半時　入
ま納の糸を尽ふあ　ハ色　堂
云ハ流ふ後ふ絵を書て出る　蘗

夕風の花の始終を四仕舞　堂
分は消えゝ行かゝる枝ぶり　入
已う名を明るく人ふうち任せ　外
折れておりゝき絵の通ひ　堂
背入て流るゝ情ふ涵くゝ　壁
鈴日吉つゝかうつるふとゝろ　外
琴莊月秋を惜む色のち　柳莊
萩吹とゝ分る市のむら　希言

とゝ柳ふゝ鯛の味と色　左琴
笠ほゝろとゝ尼の弦勝ち　喜年
祝の日ふ案ゝる袂をゝまゝ　其静
志ゝのとゝる去れ重　年
色売れ姿の残る花の領　仝
お集りてのゝそく弼　静

コシ
キ入五

草人（ミノ）一　吐丈一
岳輅（ヲハリ）一　柳莊一
素驥六　希言一
乙堂七　左琴（ミシ）一
嵐外（カイ）五　喜年三
雲帯一　其静二
如毛一

湖雲

鬱湖

湖の小ぶねこしぶる田螺とも　素驥
日ぐらしのよくうたる秋の柳　雲
稻雀ふ夜更ぬまその月うんて　驥
顔さしのもれ出ぬくの絶　雲
雲の四ぐて入しき崖の蕎　驥
美濃の風のさ吹くる蕎麦畑

庵時雨の細き降りふれまれ　雲

春も高ふ低く一むきの花　仝

薄の袖夜の神も坊うあき　麟

起て恨をゆたくとふ　仝

つれなや紙きりの音　雲

咳氣のうるさの姫しら　仝

玉の月と詠る絵のうち　麟

其若も咲すゝ幕もかし　仝

蛍ちまく魂ふき秋のうち　雲

ゆくも高てさうゆきを利る　仝

快箱の行も林しき花の跡　麟

俤吟ふ世活の狗る山吹　仝

芽苗ふる根の去を蒸へたて　雲

昼ふ門を明て休む　日　正阿

里くにむれて代殖む雇　竹庵

まふ時を国を居まん　其齢

生涯のよろこび袍を元出し　万侑
暁くふかく別を傳る　鬼洞
次の間を弱ふ拭うき汗便わ　艸龍
何人もつゝぬ本を拭てたく　子厚
風さ汗ハむしの侵て世を送り　阿上
日暮くふ虫歯わすれ　雲
まち侘る宵ハ月の初月和　阿
馬をまゝせて二度別する　庵

いたゝくとこりの医ハ陳腐の致　齡
又も理屈の人ハ家ハあり利　侑
あゆふけの仇るもあり切簾　洞
手吸こ度すこ花ハ出元中　龍
疫病の草鞋のゝふ仕ゝみ　厚
巣かゝる鶯の出てり　上

湖雲（ミチクモ）　十一

素檗　九
正阿　二
竹庵　二
其齢　二
万岱　二

鬼洞　二
艸龍　二
子厚　二
阿上　二

田家　素檗

蓑の雨　鳥の足に泡のつく
垣ぬりしきき大根の花　隆之
稚菜を朝ゝ市の商ふて　檗
きのふもけふも餅すまず　之
吹ゝ行る風のもとて月の秋　檗
牧地を行の名ふるひ　之

草の葉に苔こはれ頼母しけ　蘗
出るほどひかる花根つくる　仝
休むひとは枝ぶまるゆ者者　之
見へぬ頭ほ人のかぶそひ　仝
言かゆ如時も踊るとすあ　蘗
憐うまれハ枝くこ恋しき　仝
月花暁月花も今十日　之
今朝の地色ふ出て蕨の芽　仝

死ぬ時病を又もふひ切　蘗
啥こうる牧ふ沢中啥する　仝
其まに不苗のもむるの森　之
きけを中ほとうえ貝の音　仝
時くふ住うき宿のう松田年
蕨をかりて一束とほ松乙
物無に長仏高塔もおし　蘗
長ふなもれちかふ　竹齊

来ぬ人を主屋の庭に立ち
待ち待ち待つ程に日の暮れ
静かなる庫を開かんとこゝに
こゝろくにぬけて欲ほとを
まく舞ひぬ花をとりて洞を
起さんまて能庭入あを
夕月和暑けくの花遠く
枝世ぬ秋の初手ぬ

乙年齊驥乙年齊驥乙年齊

見まて仁義の要を織る後
野とあれハ能ハ能ハ
時雨にたゝぬ工夫の法を思
笠かゝて蓑刺る言
この節の花を南へ吹ちし
蓮のうか湯南へ乗下秋

乙年齊驥乙年齊

隆之　九
田年　五
松乙（ムサシ）　五
竹齊（十二八）　四

斗入

所思

乞食して紀州に赴き楊枝
を買ふと言ふまゝに菓の花　素檗
麦畑の畝の吹消ゝ　入
晩のさゝひの口もゆゝし　檗
夏のわくらゝと月の人面　入
過ぐさかゝる怒る鶏　檗

入口ふ弱ゆふ楠を聖堂へ　入
過るの高き体色のうち　蘗
立かゝるまゆけと絶き流の秋　入
まき〻答の拗ふ苟　系　蘗
校舎戸ハ去年のうち倒れ屋　入
腹のくゝ〻きさ秋中の秋　蘗
ありし夜の月あり夜を踏うり　入
小町う墓のさゝれぬ立場　蘗

汁の実ふ芳しき香をえつけ出　入
朱ふ小〻橋ゝ一あゆまこと　蘗
花ゝ多ふ細ふの板庇　入
子の形ちを思ふゆつり葉　蘗
氣の抜ふ帝日も暮す紅葉　仝
布子の色を先ん殆て見る　若人
新屋敷も寂さん打ほうり　蘗
茶のおこりのつゆき山茶花　人

多くに時の哭多者　蘖
泣ぬるに魚をとりする　人
俳をして部屋を生る所者　蘖
書も日〳〵ぬる顔　人
時雨雲に泪のはらん　蘖
青森〳〵の家も粧ふ　人
帳ふる月のたすけあるまち　蘖
いとも高ふやいとあさく　人

立臼か本樫の風のいまれる　蘖
分の時うかる樫葉のうら　人
世を祭出口上をいひそかし　蘖
那なさ白〳〵小曙　人
屋の死の自もをるく蓋　蘖
蜆とまふ小貝　人

斗入（コシ）　九

素壁　十八
若人　九

甲子吟行ふ白ひとをとめ奥ふ
かくもたるに山ふかく白雲
峰かさり烟る谷ふ埋んで書れ
たるうたの石ふ苔生つれたつら
かき文字ふ入るとくくの
清らのとくくとまゆをちかた
山をくつ伏つくくけ西行庵
のさま清れのゆをとんかの

とくとくこんぶ雪ぞかゝる花
袖ふれし芭蕉翁のさゝやき
信世すうそやとのひびきを思ひ
出るに身をすてゝこそ
さびしさをかくしかねたる
ゆふ雲清原をはらふ庵ける
まぶたに住の月清てゆもいと
すみわたるあ
世をはなれ高ゆ橋の山路ゆ　士朗

我宿や柳ゆ花　石池
むくゝと葉ゆ柳の花　其外
京年のもゝをとゝ柳の実　曽人
雪とゆ柳ゆ花　阜池
ちいさいゆゝ物の影ゆ　其成
ゆ柳ゆ実てい意すゆ雀ゆ　升六
雪ゆ白くもゆゝ物の花　魚心
ゆゝかに蕨ゆ京の物の花　泉左
雪よ京ゆの戸ゆ暮をゆし　桂五

雪のふる中へたる枯枝哉　甫秋（カヒ）
雪かゝるもせぬ霞うゝ　鶯岡
雪や今ふ苔なる枯枝して　除艾
宮ゝ風ハ水ゝるゝを伝ふる　恒見
黄雪の時ふせハたる松の色　五雄（ヨハリ）
雪ゝ吟ハてもあゝふ仲間ふ　鬼洞
雪に枇杷の古枝又ゝたゝ　素鼎（ムサシ）
うゝもすゝ一ゝ降ゝ雪の中　三都良
ゝ月空や雲も祝ふゝ月のけ　左琴（コシ）

わ毛麻する腰ゝ出来なゝ雪の新　田年
七草のあゝ為なゝり稽田ゝ　宇柏（アキ）
ゝ菓ゝや何もたくゝまぬ人の新　鰹守（カヒ）
為ゝに法ゝ雪ゝかけたゝ山風　五芳（コシ）
為叶や犬もゝ人ゝおゝる為の為　三札
雪風の吹ゝて八ゝ生ゝる芦四ゝ　壷伯
雪風やかゝゝ乳ゝ人ゝ油煙　雨節（ヨハリ）
山里ゝ雪ゝ俺ゝ新麻こき　枝直（トフサ）
雪ふゝるゝゝて桂の一ト仕事　有望（フンゴ）

駕のつゝ出しゝ有る赤樺　斗樂
百ふ曲けて樺を蔵せる家　雪雄（京）
その黒い樺の赤の蔵毛久之（ムサシ）
数の為の黒束有り　白椿　井眉（大オカ）
小柴を枝ふ一枝伯の雨　如陵
魚とり連ふほういう去り　魚堂（ヨハリ）
蔵の戸を伝うさゝ絶去る　鶴鳴（イセ）
蔵ふ海てかゝるものはるの雨　道考（ヨト）
連翹の郭戸かしあり雨去る　仙市

黄百の二変降かゝ徒ゆ　蒺九
きのかも降きの絶去る　若人
枝をとゝよ去る百の連七俗ふ　方明（ヨハリ）
青ふ去る百うする桜郭　半星（ムサシ）
陽炎の世に明る去や　素郷（ヨリ）
伊炎や去ふほうたる遠切し　夫山（ムサシ）
と鉢も入る芦辺の路や堤汁　吾来（チクモン）
と食ふすゝに歯ふ二月ふ　阿上
月やゝ入る海の上　宗樹（京）

早蕨やいつ迄雪のあと　嵐底
雛のまち根分を待て菜の苗　義車
と角くいくの里と時　雄　友國
性るのゐにほとける山ゐる　儲史
そ川あをと落かゝる雄う邪　護物
大和路の夕かすみて曉月　買月
曉雨や雲に有たる雲の跡　柯曉
二枝ともあき梶林の月和ル　年眉
鴨ものさうかゝあるや雲の月　岳臺

田の名の江五月雨か軒の曉月、天鄉
雲の秋の月ふ淋き芋田ル　柳荘
狩らの蹄鉄ー生雲の芋　哉堂
青海苔ばかりきハ芋の糸ル、谷水
いつの月ふハ主の雲を生る花　吾七
雲の海へ分ル出り邪ゐ、漫々
分のうけを由すり出る田螺ル　微席
田子作月のそ命ハすハ泊り　東水
曙や江鮒のそ心東風り吹　柏翠

苗代か天の香久山ふる日うれ　祥禾（ヒセン）
白炭の中ゆ〳〵しらす日ロまて　田人（ナリ）
時雨ゆ待の音ふるへるの、　行岱
瓜先の動〳〵時かゝきたる　木鶏
芳噪ちきき寺くきしの夕　青梁（ナツヘ）
横かゝつて葵の這入る窓の邪　一之
燕来て昼けしき寄る章魚か　孔阜（イセ）
帰る雁又ひゝ清る本の間か　蘭儿（チリセン）
秋の風と丈に春の芽を張る　三生

猫の恋ふる秋うゝ寄かゝ　樗堂（イヨ）
時ゆきてよろこ柿の嗅嗅か　太年（カヒ）
柿の恋すゝ魚ゝかゝり　素流
京猫ゝひゝ森ゝかゝ毛　了國（フセン）
苣畑や日和ふる草ふる　三弥（コシ）
ゝゝひかゝつ花茎　蝸國（ハリマ）
草の戸の茶売や深〳〵ち　半古
大空や梅の曙ゆ出　雄尾（下ツケ）
木瓜の花何ふゝ初もする　南雄（ムサシ）

あるかさも安り万を木瓜の花（クルメ） 文角
蓑入の影もつけよ梶の葉 一桑
ひく汐ふつかてもぬき滴うれ（エツヤ） 方三
大松の勝手あらしほとゝきす（オク） 渕九
うんこう度の雲りふ情かな（下フイ） 雨塘
わ雲やわ先とも旅の空（アハ） 葦泊
わ雲ばかりめこそ恨ばし（ヒタ） 東有
ゆく雲や笠一法の面も姉しのも（ヨク） 晋莪
雲やわ雲たちそへてほとゝきす（ハリ） 玉屑
むら山ふ比良のつきて雲ぬ（カヽ） 眉山
ちよほくと朧の時に月ふ 魚卵
る佳らふ二日おろ水て良之（ナカト） 羅風
七草とゆもうえん良之（アハ） 郁賀
墅日よりもきのふ庵や若梶（テハ） 長翠
窓ぬとん持て梶の月うふ（フンコ） 葵亭
初の花や月のそてんはまいとの（ヨハリ） 棋間
初の恵をうえすえる果て有秋海（ヒタ） 九渕

雪の光ばかりくらるる上　鹿太（上ツケ）

祢宜の来て居てハ新米炊　石鳴

小鳥の雲に巣籠り　路川（ヱト）

雪うち解も時ゝ降かきはらる　一草（兵コ）

花望月の亟もほうまず　玉峨（チクセン）

赤の夜ハ裏ハ編ふかきつちる　耳谷（カヽ）

雪も時て居る樹やくんこる　艸司

宗古雪ちるつけの花ば便りゐ　乙見（カヒ）

京ふうう蔵の廣ちよかんこる　葵市（ヱト）

宗古雪時や六日の加茂堤　若翁（イカ）

ゝ時ハ一羽ゝ行ゝ子　麦茂（下ツケ）

あまゝある里ゝもすすわゝる　与人（ヨク）

月雪のあゝひハあゝし温雲扇　萬山（ヨハリ）

住ゝもおゝて雲ぬる雲扇ば　文哺

月雪いつもの宿ゝそけの花　蕉雨

月傾き松とゝ雪おりゝの雪　如毛

鶯ゝもの来て動ゝ雪花の雪　太嶺

けゝ一ゝと脊の延ゝて雪ふゝ　對竹（ヒコ）

屋島沢庵の子の育つ所　白夜（アト）
苟子見て暮れまほしかりき　成美
ちりぬると風も冷えまさり　大峨（ヒセン）
行のふと紅葉の八重葛　瓢風（チノセン）
蟬の声や笹の葉うかべる　跡ず周（アト）
裸身の偶もあるし麦の秋　巴江
麦うりを見るまうつし麦の墓　嵐外（カヒ）
麦刈の秋ぞとなれば我の強　吐犬
松ぬけの影かきまぜうしろ　百非（ヨク）

山住のそらめかるる竹柱る　六轡（京）
二枝ほど夢のうちもて時雨　仙風（テハ）
ゆゆて小鶏のうちもて岩ゆ　喜年（コレ）
今の眠る松ぬちの風の音　棋人（カヽ）
時雨蓮とうの白ひして　松乙（ムサレ）
きくまて八方きく空ほとまず　冊頂（大サカ）
青空ふたりまつて夜部に　素薗
日暮まてうつ移て歩行菓　于當（アフミ）
居垂や老も稔をとき初て　亜頑

こてこてと数舟ふなばしを稿ふる　巣兆（ユト）
数株を見てそれ八重咲八重蕗　囮嘯（コシ）
数株を出て枝ふるも八重蕗　奇淵（大サカ）
江五人の目をかくす数株　糸葛
海苔生やふるとしなかの数株　篤老（アキ）
蕈絲やきき豆の焼豆やすし　正阿
夏の数をとしふる蟲　魚洋
夏の数や笋を倒す蟲　雀堂（カヒ）
山ちの深そるかハ仏す蟲の多　東原（ヨク）

子供らう来てつの田を植みれと　春人（大サカ）
孫石子ようかしかこうかふ、　尺艾
茨の香のこほれて伝馬川　東雲（コシ）
雲の数を植ふるう数舟ふ　呑鳥
笋の竜やとり出て百合の花二つ　鷺白（上ツケ）
ぬれて二ツ海士うるうるく夜の海　空阿（京）
夕白雲雲のそのいるかり　北尼（カツサ）
花ふるふむしとを惜ふ小六漆　澧水（サカミ）
切屋青一時ち風もかし　虎杖

何かりとさ〜ゑせ彩を加ふ蜜　蓬杣（ヨハリ）
ふかき花の暑ふよ　雙蛇（アキ）
乖桂〜月を仕そ　月巣
螺の音の落入や五月雨　有圭（ユト）
枯萱に類白の晩る暮ぬ　万俗
灯ともし初まる夜の涼ぶ　千崖（京）
涼〜ふ夕白の花川あげる　竹庵
涼〜ふと抱あげて面白山　許友（上ツケ）
すゝ〜ふのすせて揺く第尾　呂利

孤の壓泡吹ちゝ〜ふあつふれ　古周（コシ）
暑〜して麻とつゝもや木曽の月　宗有（京）
滝入て帷子かもゝ〜二階入れ　岱李（京）
白ふのゝ小てゝるの花の科理ぶ　秋峯（ミカバ）
夕立のあこうと吹やそ地の系　斗宵
暑ゝたゝ夕やゝふれて京分あれ　硯静（ヨハリ）
白蓮の一輝さまを稽の中　桃蹊
夏祇系杉を鳴る日の白ひゝ　杜口（カハチ）
小ゝふふてぬける蓮の揚ぶ　可都里（カヒ）

みちきして芦ちる穂か出るまくに　仲龍

今年の行基の使のまとをしり　一左
行人のたちかをえくしたの秋　天朗
赤手を赤かねはたちやそ年の秋　葉便
相の国やこて畑の秋の夕　天有
をしかる秋ちる時の白しか　春唄
秋来ぬ〳〵えくぬ時の紅ゐ　大左
六月の秋の白しや茅の松　重行

文月やひとり庵の柴の扉　椿堂
秋〳〵とかく秋のこゝろ　冥々
唐桑の夜をかるや星の月　方居
七夕にうゝ〳〵ゆ茅か　花叔
星の秋をおく白か文一星　鞍風
星ゝ月雨ゝ時か雨ふり　士國
秋〳〵や星の屋ゝの秋ゝ　双亭
雨の雷の音ふ立ゝ雨の川　冬化
かゝるやをわゝ月ゝ星の月　帰樸

人とうて去る色の月秋ぞ　梅香都

魂祭を祈るて八瘡る旅瘡ぞ　寒屋（ノト）

ふるさて八まく時世一秋の子　少汝（ヨハリ）

ちかやうれ秋ちかりるとこの花　芦九（京）

朝ほの事するまれ秋く多　真貫（カヒ）

朝ほか年よる紅れくく多　千阿（ミノ）

幕ちくもめくされ時ふり　希言

ちちる色やちりくいる花の時ゑし　雲帯

桂校やくさちき世ふり者の秋　物成（カヒ）

如帝茶扇の風ふまま一足　寸雨（コシ）

むしの時やかかうけ時ふるの子　何尺（コシ）

すく生の羽まて春ふつくひ足　芳之（アラミ）

芋生のあてれ四ひき秋ぞ　乙九（ヒタ）

うくるの中ふ入ちる三日の月　大阜（ヨハリ）

四月くちたくさふんうれ　素明

葛の茶のくくもすく時ぞ　呉未（兵コ）

夢表細やもいさまふ青の宮　春臺（大カヒ）

待くし伝居の弱や秋いさみ　如陸（ヨク）

花菜苦楝　恒九
稲の香とりまぜたる出汐　竹里
木啄のゆをハ初んあく芝とを　泰雄
立ちとふ赤やせもの一トところ　綾房
なまぬるい嵐ふもとや寺の雨　一作
白雨の時やうの人事まて　巣居
別れても有るものなれ雨の玉　秀山
雨の戸ふ打ちきりぬ夜の山　雨蘭
雨をたくおのひとつを峰の売　棟價

起ちかゝる時なれ君のとゝりれ　何彦
時のなかゝるかゝ伏ハ岩ちとと　十寸影
伏つゝとと戸もあく時の乱れふ　乙堂
ちれ乱や夏とのつくもこゝ日　其齢
蔭和しと戸と萩の板もうふ　蘭叟
あ音ハ雨ても庵ハ小田の有　烏頂
戸時や吹ととふふ　庇　伎
波れて乱やふたまてのあしふ　田都留
伏胃ふうとふふ沾れ　有斐

茶多く持て榊ききぬるか　平角（ナシフ）
松こゝて芝をさゝて張り那　岫九（ヒユ）
清八ゝ子の乳　京（京）月居
よい新大原原而も席の多　涼堂（ヨクリ）
秋風や舟やゝ点る子の門　葛井（ヨハリ）
稲妻や声也ゝ和のたゝまき　椎巳（イセ）
夕ゝ小や蚊つくぬ紙　子厚
榊ゝ中の蚊の体む行の中　草九（カイ）
ちゝ時も木槿の花の雪りか　真蓑

秋もゝ初る木槿か　魯馗（ヨク）
麦の形のあゝ小て若の枝榊し　槌村（アイ）
山里の中ゝ小ゝ八原ゝ　朱紀（カハチ）
次と梯ゝ風葉ゝ秋の山　希扶
来ぬまても孫ふ人のまゝ　草人（ミフ）
四五日の栖と為ゝ　湖雲（ヨク）
ゝゝ小ゝ秋や伝法の椎ゝ　快哉（ヒタ）
秋ゝの降せゝ原栖ゝ　千沚
陽附山の芝梯ゝ　馬城（カイ）

ふるたるぬ海士をとおか芙蓉ハ　大サカ　春哉
一年をかうきものゝ菓ハ花　アフミ　可盈
菊の香やしらゝ露のとりゝ白ハ　ヨク　史方
白きくやひらふるる鞠のまき迄　カイ　巴岡
せいしやの笠のうけふしらふの菓、　蘭亭
振袖の出るや秋の竹の杖　青以
鞍つけハ馬もお咲ふ秋きゝ　京　茂良
鶏ゝや鳥の海るゝ川乃上　ヨク　一會

草鞋のあと訪ふ赤菊の時ふ　大サカ　竹齊
雪ふるや海ふ時ふの降ふる　ハリ　厚九
初しふる松の鈍ちふ迄ふ　何籟
馬ふるや大ゆ〳〵時ふ　クルメ　格兆
うけぬけてふても海原の時ふ　大カカ　麦太
赤ちの菊ハ苦むすまふる　ヨハリ　兆加
をゝ〳〵らふて雪ふる夜ハ　イセ　南江
山茶花のぬくみを持て日ゝ雪ふ　アキ　路宅
山茶花の新もちふぬ春ふ　ヒタ　元々

蜂の巣の吹きて出るり枯柳　不外
赤い葉ちらすかちつくよみの菊　蓬宇（カハチ）
雪の末初てうくぬ枯ゆるか　憐霞（ナカト）
鶏けや雪未てうくハ物の音　菊也（ヒセン）
暦大やとりの大事する海の音　太筥（ヤフヤ）
旅人の跡とふ雪の入日かな　山川（コシ）
雪の日をうてあれ垣の物ゝき　棋朴
逢坂をきのふ舗ふ小雪うれ　夜来（ヤナカ）
うけくと相の実集すふ雪かな　浦人（ヨグ）

雪ちらくと魚うんくき小雪かな、物白
旅人のさうゆきまきふ雪かな　雉啄（ナカミ）
枯うけや雪を枯ゆるかれ　琴州（サツヘ）
末年もまくさ生て雪よ綱代す　可考
つうとる尾雪のちりの十和か　山甫（カイ）
雪う枯茶筌ふ雪の日影か　左誥
鶏う来て嶺ふ枯のある雪ふ　蒼虬（京）
雪かふしゆ夕暮時の中やすみ　得芝（ヨハリ）
風や沈香の枯ちる雪くとも　文郷（ヨク）

古かしや京と家の岡なれ　カ、鹿古
風やふくき屋の升高し　ムカシ國村
青くふ清もちつさぬちとりぶ　千大
音波や目ふもかるる時ふ音　ハリマ布舟
淀きやさの人江も野ふ　大オカ釣翁
在明や波ふ清森のあも　ヨハリ鹿野
野ふ初ふ雨こすを　アキ玄蛙
あとはあきふと小秋角　上ツケ巣也
ふふの北ふし白ふ紅の月　ヲク雄渕

雲の多い野あるのあ　イセ丘高
森ふをるふふて時ちふ　テハ三夕
大乱る秋やかるる時潮　雄途
ふの日を帰府しふふふ　泉何
時つも居ふて秋ふ野　兵コ桐栖
秋ふ秋をあすして後金ふ　大オカ三津人
篇の背ふふも時ふ秋ふ　ヲク蘭吹
ふふふふふふりぬ新の新、　有是
秋を居ふて森ふふの月、　投雲

納涼さくや佛も動くこの声　北溟（ヨク）
音高の牛ふりつゝ雨も静かなり　岐東（コシ）
蔦枯て旭の夢よるあたゝ　楓江（ヨク）
枯葉言ふのまてふ老尼　芸門
枯尾花何かかゝり月ひたき　菖三（オカミ）
袖浅ぬゝ塩よう枯尾花　芦陽（カイ）
ほつりんとうつろふ事ぬ屋俵　滄波（イセ）
さゝ音や春の森翁すゝ　隆之
乗かついて三ひ生かゝ尼言の事　八原

椎葉のよき世を人する秋の雲　朱彦（オカ）
淋しかふ立ける松もよふの雲　岳輪（ヨハリ）
あゝ海音を待まて老かゝり　風叟
霰やむあと色つゝしき山ゝ　松夷（カイ）
折くや兎か曲る膝かしら　小泉
雑仮は平汐さゝ来尼紅葉　暑隠（オカ）
鬢音やハ音あてしこのすり衣　見二
あまさゝ入て老ゝ入ぬゝ浪　亀白
老のゝのとゝゝ枝　ゝゝさゝ　日人（ヨク）

梅の香かもこれ中なる谷の入（ミニカカ）迄之
むしろ帆のかすをし来る海乙（サク）二
京
念仏あけすの門ふやとたり素頑
夕雲の岩ふるとすかたちか其（コン）静
乾徳も梯て地蔵の裸うれ蜂（ホウカカ）友
かゝ鉢か味のあるてをむすんだ佳（ヨハリ）雄
山里を遠く日の出る樓り邦武陵（タンバ）
春て起てゑ借のあるや物の花真恒（カイ）
道某の先ひらかくるを物天（ヨハリ）尤

すゝきや依のうの沼くるか竹（ヨハリ）有
鹿くの岸嶺ふるの物是三
杉梅かるの名呼てとしをあ百（ホウカカ）堂
大根ふゝ戻りぬ夜くを、長齊
湖の水見て年を立ふ見大（ヨハリ）籟
京門の杉も世ふ出かか時をふ芦（クルメ）月
山川ふ流るを京や鬼やひ荷（ヒタ）逸
杉姫をすりて立をし年の舟東（オカミ）洞
雪てゆ年の中も志のあ山詠（上ヲ）帰

水仙花のさめて如意しの年の春　常南（アト）

ゆくりかく叔父の年の春　蘿堂

行年や小松屋も春のうち　雨暁

節季ぶの出口を出て戸口ぶ　啓山（ヒラキ）

かけ〳〵と芳つむ年の中ふへぶ　騏六（ヲハリ）

行〳〵て果しなきぶ年の春　菩雪

文化の七とせ卯月の十日江都湖

東京の春すでに深しとあつむ

蕉門書林　皇都寺町通二條　橘屋治兵衛梓